

2021年度水環境文化賞を受賞して

川西自然教室 代表 田 中 廉

川西自然教室は大規模住宅開発、新名神工事などで、私たちの身近にある貴重な自然が失われてゆくことへの反対運動が母体となり1993年に発足しました。市内または周辺地域の水田や畑、あぜ道、山、池、川などの自然が残っているところを歩いて、どんな草花、生き物がいるのか、自然に親しむと共に、コツコツと調査し、データベース化をしています。会報「こげらだより」の名前の由来は、行政の行動について小柄のキツツキであるコゲラが木をつつき、内部に巣くう害虫をつまみ出すように、常に監視の目を向けているよという意味です。ただ、そのくちばしは30年経つうちにかなり丸くなってきました。

活動内容は多種多様です。毎月行う活動は、①例会下見と例会（川西市周辺の里山探索。うち2月は水鳥一斉調査、8月は水生生物調査、11月はリンドウ調査）、②植物観察会、③里山整備、④猪名川河川敷のゴミ拾い、⑤キノコ観察会（4月から11月）です。調査活動は①加茂地区でのヒメボタル調査（5月1日～6月中旬まで連日実施）、②探鳥会（5月）、③市内39カ所のゲンジボタル調査（6月）、④妙見山山頂のヒメボタル調査（7月）、⑤セミの羽化観察会（8月）、⑥虫の鳴き声調査（8月）、⑦ヒガンバナ初見日調査・会員からの情報収集（9～10月）、⑧セミはいつまで鳴いているか調査・会員からの情報収集（9月～10月）、⑨市内4～5カ所でのセミの抜け殻調査（9月）、⑩市内22カ所でのリンドウ調査です。環境整備として①猪名川の清掃（2月）、②ヒメボタル生息地の竹藪の清掃（3月）、③水生生物観察会実施場所である芋生川の清掃（7月）を行っています。また、特別行事として①加茂桃源郷散策（川西市は桃が特産）（4月）、②野草を食べる会（3月）、③芋煮会（11月）を実施しています。

会報は毎月発行し会員以外に、市役所各部署、市議会、公民館、幼稚園、学校などにも配布しています。

今回の受賞の対象となりました文化活動の一部についてご説明します。

川西生物情報データベースの構築：川西市の生物相の現状（分布状況、経年変化など）の基礎的な情報を持つことは、市や周辺地域での自然保護や、生物多様性を考えるうえで大きな力になると考え、1994年より毎月発行の会報「こげらだより」に記載された生物をピックアップし、標準和名、観察日時、観察地、会報の号数と頁、状態（抜け殻、声など）を、国の「日本のレッドデータ検索システム」に準じた分類項目に分け、エクセルに入力しています。現在2019年末までの入力終了しました。その結果、調べたい生物（例：絶滅危惧種等）が川西市内・周辺に生育・生息しているか否か、生育・生息しているならばその分布域、確認年度などが簡単に知ることができるようになりました。珍しい生物だけでなく、

身近な生物もできるだけ記録に残すようにしています。セイヨウタンポポとニホンタンポポの分布状況より、各地の自然度がある程度わかります。また、川西市北部一帯には国の史跡「多田銀銅山遺跡」がありますが、鉾山の指標植物であるハクサンハタザオの生育地より、川西市内の鉾物資源の分布範囲がわかります。問題は、素人集団の同定なので、どうしても間違いが生じることです。同定が難しい生物については、専門家に聞いたり写真を撮り残したりするように心がけています。

水鳥調査：川西市は南北に細長い市ですが、真ん中を南北に猪名川が流れています。毎年2月に猪名川本流、その主要な支流と市内の池を手分けして一斉に調査します。1997年に開始し、今年で26回目になります。オオバンが2016年から急に増えてきましたが、反面ユリカモメ、バン、オナガガモが少なくなりました。水鳥の種類、量ともに南部では多く、北部は少ないという傾向がここ数年間続いています。これは、下流（南）から始まった護岸工事が上流（北部）に移ってきたことが原因の一つと思われますが、上流のダム湖でも水鳥の飛来が減少しており、その原因は不明です。

ゲンジボタル調査：川西市内を流れる河川の水質はよく、各地でゲンジボタルが見られます。調査日時は年により異なりますが、5月下旬頃の5日間の間に猪名川本流、支流の39カ所を会員が手分けして調査します。1994年から調査をしていますが、2013年以降、大きな山がないのは市内最大の生息地であった石道地区が、新名神工事が始まりつぶされてしまったことが大きいと思われる（図1）。

今後も、受賞を励みとし、保護、調査、楽しみを基軸に活動を続けてゆきたいと考えています。

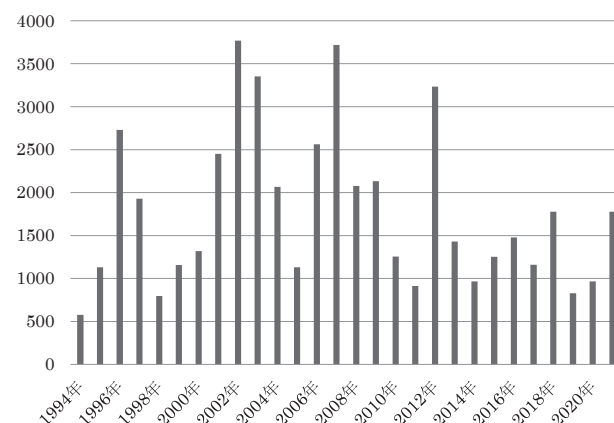


図1 ゲンジボタル合計数の推移 1994～2021年